

〈書評〉

## 「わたし」のための祈り

宇佐見りん 『かか』 『推し、燃ゆ』  
について

森岡桃子

誰かを背負って生きることが難しい。ひとりきりで生きることが、もつと難しい。だから、自己を分散させ、ときにはどこかへ依存し、複数の「わたし」を作り上げるようにする。「わたし」を複数用意すれば、「わたし」は総合的に安定したように感じられる。SNS発達の影響も大きく、「わたし」を増やし、分散・統合することは容易になっている。このような複数化する「わたし」のあり方は、「生きづらさ」が可視化されつつある社会において、ますます増えていくように思われる。しかし、他者との隔たりを意識せざるを得なくなつたいま、「わたし」はしばしば、自分が依つて立つべき場所を見失いそうになる。「わたし」は迷い、内に籠つたり、他への依存を強めたりする。「わたし」を増やしたり、消したりもする。分散と統合を繰り返す中で、自分のほんとうの居場所、ほんとうの「わたし」を欲望する。

2021年1月20日、第164回芥川賞（2020年下半期）の受賞作が発表され、宇佐見りんの『推し、燃ゆ』（初出：『文藝』2020年秋季号）が選ばれた。宇佐見りん（1999〜）は第56回文藝賞を受賞した『かか』（初出：『文藝』2019年冬季号）でデビューし、同作で第33回三島由紀夫賞を受賞した、新鋭の作家である。こわれてしまった母親の救いを求める19歳浪人生の思い、そして彼女の旅を描いた『かか』。「推し」を推すことに心血をそそぐ高校生の少女を描いた『推し、燃ゆ』。どちらも「生きづらさ」を抱えながら複数の社会を生きる、十代の少女に焦点をあてた作品である。

芥川賞選評において、平野啓一郎は『推し、燃ゆ』の主題を「寄る辺なき実存の依存先」<sup>1</sup>と評している。どんな時代でも、どんな場所においても、人間は「寄る辺なき実存」であり、確固たる安定した「わたし」など本質的には存在しないのかもしれない。それはありふれていて、もはや自明化された主題なのかもしれない。それでも、『かか』と『推し、燃ゆ』は寄る辺なき「わたし」に迫る。書き手は、SNSや「推し」との関係が主流になった現代に身を据え、複数に分かれた「わたし」と徹底的に向き合おうとしている。

二つの作品に登場する少女は、痛みに敏感な人物だ。二人とも、肉体の感覚に基づく他者への強い共感性を備えている。身のうちに入れた他者の痛みは、丸ごと自身の痛みとして共有されるのだ。一方で、その姿勢は他者への共感性を欠いているとも言える。他者を他者のままとして、自分と別個の存在として捉えることができないからだ。

最も大切に想う他者を自分の身に取り込み、痛みによってその生を認識する。SNS上でアカウントを作り、もう一人の「わたし」で、他者と交流する。そんな彼女たちが自己の根幹を失うさま、「喪失」の経験を描いていることが、『かか』『推し、燃ゆ』の共通点である。<sup>(2)</sup>

### 喪失を物語ること——『かか』

『かか』は19歳の少女〈うーちゃん〉による「告白」の物語だ。その告白には独自の言葉「かか弁」が用いられている。「かか弁」とは〈うーちゃん〉の母親〈かか〉が家で使用する「似非関西弁だか九州弁のような、なまつた幼児言葉のような言葉遣い」(13)であると説明されている。標準語と異なるリズムで唐突に始まる〈うーちゃん〉の語りが誰に向けられたものであるのか、最初は釈然としない。しかし、〈おまい〉という二人称の登場によって、語りの

相手が存在することが確かめられる。〈おまい〉は〈うーちゃん〉の弟〈みつくん〉を指しており、〈うーちゃん〉の語りには〈おまい〉と〈みつくん〉が入り混じって登場する。〈おまい〉という二人称が〈みつくん〉という三人称的呼び名に変わるとき、弟に対する告白という姿勢はわずかに崩れる。〈うーちゃん〉が〈みつくん〉と言うとき、〈みつくん〉は〈うーちゃん〉の話し相手という立ち位置を超えて、〈うーちゃん〉の物語に登場する独立した個人として浮かび上がるのだ。〈うーちゃん〉の語りは、自分自身への語りと他者に向けた語りとが混じり合う形で進行する。他者に向けられていくから、告白ではなく告白なのである。そして、彼女が告白するのは、〈かか〉を「にんしん」したいという思いだ。

みつくん、うーちゃんはね、かかを産みたかった。かかをにんしんしたかったんだよ。(13)

先に述べた通り、〈うーちゃん〉は痛みに非常に敏感な人物である。しかし、痛みへの敏感さは条件付きであり、「相手をからだに取り込んだときにだけ、そいを自分として痛がることができる」(15)と言う。例えば〈うーちゃん〉は、ピーラーで剥かれた〈かか〉の傷跡を見て、「自分の腕のおんなじ場所をアルコール綿で拭かれるような独特の冷や

「こざ」(20)を感じた。

それは本当の痛みにかかかった、かかの痛みは望むと望まざるとにかかわらずうーちゃんに乗り移るんです、前にそう言ったときおまいは信じられんかおをしましたが、本当のことです。

うーちゃんとかかとの境目は非常にあいまいで、常に肌を共有しているようなものでした。(20)

肌の共有は、その肌に刻まれた傷を共有することでもある。好むと好まざるとにかかわらず「うーちゃん」は「かか」と一体化してしまっている。それは血縁以上の結びつきを獲得していて、切り離すことができない。

「かか」は自分の姉である「夕子ちゃん」のおまけで生まれたという物語を繰り返しなぞることで、自分の生きづらさを理解しようとしている。「うーちゃん」はそんな「かか」を憎みながらも、「かか」を身のそとに出そうとはしない。むしろ、「かか」の破壊は自分の誕生によって起こったと考える。

かかをおかしくしたのは、そのいつとうははじめにうまれた娘であるうーちゃんだったのです。(33)

自分が女であり、孕まされて産むことを決めつけられるこの得体の知れん性別であることが、いつとう、がまんならなかった。

女に生まれついたこのくやしさが、かなしみが、おまいにはわからんのよ。(28)

「うーちゃん」にとつては、「かか」の苦しさも、「うーちゃん」の苦しさも、こわれた「かか」を作り出した自分の誕生も、自分が女として生まれたことも、すべて不本意に背負わされた物語なのだ。

ずっと思っていたことがあるんよ。人間が信仰を捨てることはままある、それでも信仰を取り戻すことはできるんでしょうか。(36)

うーちゃんのかみさまは、かみさまだったはずのかかは、うーちゃんを産んでかみさまじゃなくなった。もともとかみさまじゃなかったんです。(35)

「うーちゃん」は、「かか」をかみさまとして信じていたかった。しかし、「かか」が「はつきよう」してしまったために、その望みは叶わなくなった。「うーちゃん」はこわれた「かか」を憎むが、「かか」を身のうちに取り込ん

でしまっているせいで、かかの痛みが苦しいくらいにわかつてしまう。だからこそ、憎むことも苦しい。愛したい（かか）を愛せない、そういう自分も愛せない。（かか）への信仰が戻らないことを知った（うーちゃん）は、心からの信仰を持つ「あかぼうのひとみ」（17）を羨み、嫉妬を抱く。（うーちゃん）は、かみさまの不在と（かか）信仰の崩れに苦しめられているのだ。

信仰を失う代わりに発生したのが、（かか）を産みなおしたいという欲望だった。（かか）を「にんしん」することで、今のようにこわれていない、「にんしん」という破壊の経験を通していない、「あかぼう」のように純粋な（かか）と出会うことができる。（うーちゃん）はその新しい出会いを欲した。「にんしん」への欲望は、自分の身に張り付いた物語からの解放の希求と同一である。背負わされた物語から（かか）もろとも脱出する方法は「かかをにんしん」するほかにないと、（うーちゃん）は考えたのである。

今度こそうーちゃんはかかを壊さずに出会いたかったかん、たつたそいだけのために、かかをにんしんしたかった。（40）

うーちゃん自身がうーちゃんたちのかみさまになるしかもう道は残されていないんです。（40）

（うーちゃん）は、自分自身が信仰の対象、すなわち娘にとつての「母」になることを唯一の救いであるとした。（かか）を「にんしん」することは、（かか）にとつても（うーちゃん）にとつても新しい物語を生み出す行為であると信じた。「にんしん」は彼女の喪失を埋める手段として欲望されるのだ。

（うーちゃん）は「家」以外にもうひとつの社会を持っていた。「ラビ」という名前のSNSアカウントを通じて、同じ趣味を持つフォロワーを中心に、交流を維持していたのである。（かか）が「はつきょう」し始めたことを契機に愚痴をつぶやく頻度が増え、学校に行かなくなった頃には、うーちゃんの属している社会は「ほとんどSNSと家だけ」（25）になっていた。

家を出た（うーちゃん）はネットも絶とうとしたが、SNSを見ることはやめられなかった。（うーちゃん）はSNS上でもう一人の「わたし」である「ラビ」の物語を作り上げていた。

投稿した言葉を目でなぞり心のなかで反芻しているうちに、どうもその言葉の主である『ラビ』がほんとうにいて、そいが本物の自分であるかのように思えて

くるんです。(33)

「ラビ」の母親は危険な状態であることになっていた。SNSの世界が〈うーちゃん〉の物語＝現実の生活を上回ってしまったのである。〈うーちゃん〉は自分を支える物語を維持しようとし、母が亡くなったと虚偽の報告をする。「ラビ」のつぶやきを見たフォローワーが心配のメッセージを送ってくる。電話番号も送ってくる。フォローワーがメッセージの届け先として意図しているのは「ラビ」ではなく、生身の〈うーちゃん〉である。恐ろしくなった〈うーちゃん〉は、「ラビ」のアカウントを消す。もう一つの社会で構築した物語が破綻したために、その社会ごと閉鎖してしまふのだ。

「ラビ」として作り上げた「母の死」という物語は、現実の事情とは全く異なるものだったが、〈うーちゃん〉は〈明子〉と交わした会話、「あけぼのやのクッキー」のことを思い出し〈かか〉の死に現実味を感じるようになる。

もしかすると、かかをにんしんするには、かかが死なねばならんかもしれん。(47)

〈うーちゃん〉は〈かか〉の死と「にんしん」の繋がりを認識し、純粹な〈かか〉誕生の予感を得る。体力を失い、

携帯の電池残量も失い、〈かか〉の痛みが同期されていることを感じ、そして空で雷が光ったとき、〈うーちゃん〉は「身籠った」「かかがしんだ」(48)と思う。「俗世」では実現できない願いが成就したと信じるのだ。しかし、〈おまい〉との電話が繋がる。それによって〈うーちゃん〉は再び俗世に、脱出した「家」という社会に再接続される。

〈かか〉の手術は成功だった。〈かか〉と〈うーちゃん〉の悲劇を根底で支えていた〈かか〉の子宮は失われてしまった。〈かか〉の子宮は〈うーちゃん〉の物語の抛り所であったから、〈かか〉の子宮の摘出は、〈うーちゃん〉の一部を摘出することに等しい。かみさまが戻ってこないこと、かみさまになれないことに〈うーちゃん〉は気づいている。〈うーちゃん〉が一度信じた物語は、もう戻ってこないのだ。

ねえだけどみつくん、うーちゃんたちを産んだ子宮は、もうどこにもない。(49)

〈うーちゃん〉の語りは〈かか〉の独白と同様の性質を帯びている。〈かか〉の独白は自分の物語に他者を巻き込む——〈かか〉の苦しみは転移するように〈うーちゃん〉に共有されていた——ものだった。エスカレートしていく〈かか〉の悲劇に〈うーちゃん〉も巻き込まれ、〈かか〉が信じる物語は、そのまま〈うーちゃん〉が信じる物語になっ

ていたのだ。〈うーちゃん〉はその仕組みを追う。〈おまい〉に自分の物語を共有することで、〈おまい〉という他者を巻き込もうとしているのだ。

『かか』は「告白」の物語であると同時に、孤独な主体が新しいよすがを求める物語でもある。そこに現れているのは、信仰の喪失、物語の喪失を越えようとする、物語り行為の力である。喪失を経験した〈うーちゃん〉は語り、また物語を紡ぐ。繊細な心を持った彼女のしたたかな生は続いていく。

### 喪失と克己——『推し、燃ゆ』

『推し、燃ゆ』の主人公〈あかり〉も、他者を内面化して生きる人物である。〈あかり〉は上野真幸という男性アイドルⅡ「推し」を、なかば盲目的と言えるほどに信じている。「推し」の生は自分の生であり、「背骨」であると言いつつ切っている。

現場も行くけどどちらかと言えば有象無象のファンでありたい。拍手の一部になり歓声の一部になり、匿名の書き込みでありがとうって言いたい。(9)

「あたし」にとつての「推し」は唯一絶対の存在だが、「推し」にとつての「あたし」は唯一絶対ではなく、程度の差こそあれ、「推し」が自らのファンと称する存在は「あたし」だけではない。この点において「推す」という行為は、一方向的なコミュニケーションである。また、「推し」と「あたし」の間にはゆるやかな主従関係が発生している。そのことを承知でお、〈あかり〉は匿名の個人として「推し」を囲む環境の一部になることを望んでいる。「推し」にとつての唯一無二になるのではなく、「推し」が生きていること、頑張る姿を見られること、何より「推し」を推すということそのもの自体がもたらす幸福が、「あたし」の生を形作るのである。病める時も健やかなる時も「推し」を「推す」ことは、唯一絶対の存在に対する祈り・貢献を伴う、信仰にも似た行為である。

あたしのスタンスは作品も人もまるごと解釈し続けることだった。推しの世界を見たかった。(14)  
 何かがわかると、ブログに綴る。解釈がまた強固になる。(16)

「推し」についての新たな事柄を知るとは、「推し」の解釈を強めることに繋がる。自分自身には興味がないから、自分の星座占いは見ない。「あたしの声に推しの声が重な

る、あたしの眼に推しの眼が重なる(19)こと、すなわち「推し」と「あたし」が一体になることを、彼女は志向する。「推し」を知りたい、わかりたい、一体化したいという想い、その想いを後押しする行為に努める〈あかり〉は極めて能動的である。

あたしには、みんなが難なくこなせる何気ない生活もままならなくて、その皺寄せにぐちゃぐちゃ苦しんでばかりいる。だけど推しを推すことがあたしの生活で中心で、それだけは何をおいても明確だった。中心についていか、背骨かな。(21)

〈あかり〉と「推し」の邂逅には、痛みが伴っていた。舞台上動く「推し」を見たときに感じた痛覚は〈あかり〉をまつすぐに刺し、そこから〈あかり〉の活動は始まった。「推し」はいつしか〈あかり〉の身体の一部——「背骨」となり、「推す」ことは彼女の身体を軽くしてくれる。「推し」が〈あかり〉の自己を形成しているのだ。

〈あかり〉の能動的な生は『かか』で見られた「不本意な生」とはまるで対照的であるかのように見える。しかし、〈あかり〉も「不本意さ」を感じながら生きていく。彼女は自分でもうまくコントロールすることができない肉体の重さを抱えている。病院で診断名をもらい、学校では保健室の

常連で、頑張っているのにうまくいかず、「生きていくだけで皺寄せがくる」(10)。肉体の重みは次第に家族や学校との繋がりを薄れさせていく。彼女は不本意な重みを絶えず意識しているのだ。

あたしは彼と繋がり、彼の向こうにいる、少なくとも数人の人間とつながっていた。(12)

〈あかり〉は「推し」という他者を媒介に、社会との繋がりを維持している。アルバイトを続けてお金を稼ぐのも「推し」を「推す」ため。ブログを更新するのも、SNSで同担のファンとコミュニケーションを取るのも、「推し」を「推す」一環である。「推し」は「あたし」が社会に立つ基盤を成し、「あたし」を現実社会に接続する役割を果たしているのだ。自分を追い詰め削ぎ取ってまで「推し」を推すことが自分を浄化し、自分の生を救う気がするという物語を〈あかり〉は信じる。彼女が生きるために信じる物語は「推し」によって支えられている。

しかし、「あたし」が追い求め解釈し尽くそうとした「推し」はファンを殴り、炎上する。スキャンダルを起こして凋落した「推し」は、人気投票でグループ最下位となり、その後突然引退を宣言する。「推し」の引退に〈あかり〉のタイムラインは様々な意見で溢れかえり、SNS上の

「有家無象」によって〈あかり〉の感情は代替されていく。「あたし」は亡霊となり、もう一つの社会で複数の他者に自分の代替を許しながらさまよう。家族から離れ祖母の家に住んでいるが、就活も進まない。「推し」という「背骨」を失ったうえに肉体が重たくのしかかってくる。

コンサートを終え、茫然自失の状態で日を過ごしていた〈あかり〉は「推し」が住んでいると思われるマンションに向かう。そこで彼女は「推し」が「推し」ではなく、一人の人間として生きていることを目の当たりにする。

あたしの部屋にある大量のファイルや、写真や、CDや、必死になつて集めてきた大量のものよりも、たった一枚のシャツが、一足の靴下が一人の人間の現在を感じさせる。(53)

かき集めたグッズも深め続けた解釈も「過去の推し」でしかなく、すべては洗濯物にかき消された。〈あかり〉の「推し」は、「推し」としての生を終えたのだ。「推し」の「死」は「推し」を自分の生の支柱としていた〈あかり〉の死をも意味する。遂に〈あかり〉は喪失を受け入れる。

なぜ推しが人を殴つたのか、大切なものを自分の手で壊そうとしたのか、真相はわからない。未来永劫、

わからない。でももつとずつと深いところで、そのこととあたしが繋がっている気もする。(54)

あたしにはいつだつて推しの影が重なっていて、二人分の体温や呼吸や衝動を感じていたのだと思った。

(54)

〈あかり〉は「推し」の破壊の理由が最後までわからなかった。どんなに解釈しても「あたし」と「推し」は一体になれなかったのだ。〈あかり〉は、「推し」と自分が合わせて一人なのではなく、一人の「推し」、一人の「あたし」がいたことを認識する。つまり、初めて「推し」を自らの内部ではなく、別個の他者として実感するのだ。〈あかり〉は「あたし」と「推し」、二人ぶんの人生を過ごしていた。一体になつていたわけではないのだから、「推し」が消えても「あたし」は消え去らない。そのことに気づいた〈あかり〉は、自分の「肉の戦慄き」にしたがつて、滅茶苦茶になつてしまった「あたし」を破壊する。プラスチックケースを振り下ろし、綿棒が部屋に散らばり、「推し」が担っていた「背骨」は消失した。今は、骨も肉も「すべてがあたし」となつた。

綿棒をひろつた。膝をつき、頭を垂れて、お骨をひ



ろうみたくに丁寧に、自分が床に散らした綿棒をひろった。綿棒をひろい終えても白く黴の生えたおにぎりをひろう必要があったし、空のコーラのペットボトルをひろう必要があったけど、その先に長い長い道のりが見える。

這いつくばりながら、これがあたしの生きる姿勢だ  
と思う。(54)

彼女は自分が生きてきた結果をきれいにしていく「長い長い道のり」を見据えている。それは失った「背骨」を自ら再構築していく過程である。〈あかり〉は〈推し〉と伴に生きていた自らを破壊し、自分で骨を拾って、「あたし」を発見した。「推し」に捧げることで支えていた生を、自分の手足で支えることを決意したのだ。他者の喪失と連動して起きる自己の喪失に向き合い、〈あかり〉は新しい「あたし」を生きる。

## 喪失と祈り

『かか』と『推し、燃ゆ』の主人公が経験するのは、自己と密接に結びついた他者を失う、二重の喪失であった。〈かか〉ははつきょうし、子宮は手術によって失われ、「推

し」は突如引退し、存在を消す。

物語を失った〈うーちゃん〉は自分が背負う物語をもう一人の血縁者〈みつくくん〉に向けて物語る。その姿はまるで「ババ」と「とと」に受けた仕打ちを語る〈かか〉のようである。『かか』の語りは、自己を社会に接続する他者を求める、模索の語りであった。自分の「背骨」である「推し」を喪失した〈あかり〉は、骨に見立てた綿棒を散らすことで仮想的な自己の死を経験し、そしてその骨を自分で拾い直す。そのとき〈あかり〉は「推し」不在の新しい社会に接続され、「推し」という背骨をもたない「あたし」を受け入れ、自己の一部を担う他者の居ない人生に向き合おうとする。二つの作品から、社会からの脱出を試みた・社会から隔てられた主体が、自己を形成する物語を喪失したのち、「わたし」を引き受け生きていく術を模索するという筋書きを読み取れた。

未だ重く、儘ならなさが残る彼女たちの肉体には、熱が籠っている。現在を必死で生きようとする生から放たれた熱は昇華し、消えていくのかもしれない。しかし、もしその熱が他者にぶつかつたとき、熱は伝染する。「わたし」を支えていた物語から離脱しても、他者を巻き込み、あるいは自己を破壊してでも前に進もうとする姿勢は、強烈な自意識と能動性に裏付けられている。『かか』『推し、燃ゆ』の主人公たちは自分の体を燃やして熱を生む炎を備えて生

きる人物なのだ。書き手は傷を抱えながらも立ち上がるとうとする彼女たちに眼を向け、精緻な言葉で、その生を描いている。身体に刻み込まれた傷を癒し、寂しさを抱く主体を社会につなぎとめる方法の一つが言葉であるということ、を、証明しようとしている。

社会をひとりきりで生きるとは難しい。〈うーちゃん〉と〈あかり〉から放たれた言葉は、自分の支柱を探しながら、複数の他者と重なり合いながら、時には喪失に直面しながら、それでも現在を踏みしめて生きる、世界でたった一人の「わたし」に向けられた祈りである。祈りは、隔てられた他者へ優しく、強く響いていく。

（了）

注

（1）芥川賞選評「文藝春秋」2021年3月号、341頁より引用。

（2）『かか』本文は2019年「文藝」冬季号（初出）、『推し、燃ゆ』本文は2020年「文藝」秋季号に依拠する。本文からの引用は、本文（頁数）の形式で示した。